

☆ あらすじ ☆

1880年、アメリカ南部アラバマ州タスカンビア。

ヘレン・ケラーは、農場と小さな新聞社を経営する父アーサー・ケラーとやさしい母ケート・ケラーの長女として、あたりの深い愛と周囲の祝福につつまれて、その生を受ける。兄弟には異母兄のジェームスと、妹のミルドレッドがいる。

2歳の誕生日を迎える前に、ヘレンは突然の病気で一切の光と音を失う。

同じ頃、ボストンのパーキンス盲学校で勉強するアニーに、弟ジミーが孤児院で病死したとの知らせが届く。

5年の月日が流れ、7歳になったヘレン。

パーキンス盲学校のアナグノス校長の推薦を受け、アニーはヘレンの家庭教師になる。アニーは、自分には教師の資格があるのかと悩みながらも、はた目には格闘するようにも見える身体のおつきあいで、ヘレンとコミュニケーションを図ろうとする。

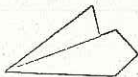
父親アーサーは、ますます混乱する家庭内の状況にアニーの解雇を考えるが、アニーは、家族に甘えがちなヘレンを家族から引き離して、ふたりきりの暮らしをすることを提案し、ケラー夫妻は2週間という条件をつけて、承諾する。

ガーデンハウスでアニーとふたりきりで暮らすとわかり、猛烈に反発し、暴れるヘレン。しかしアニーは努力を続け、ヘレンの様子をじっと観察する。

パーシの協力を得て、指文字を教え続け、ヘレンに何か激しい変化が起こるのを待ち望む――。



未だ形を採らない 豊かさを求めて――



東京演劇集団風  
Tokyo Theatre Company KAZE  
〒164-0803 東京都中野区東中野1-2-4  
Tel.03-3363-3261/101 Fax.03-3363-3265  
E-mail:info@kaze-net.org  
URL:http://www.kaze-net.org/

# ヘレン・ケラー ~ひびき合うものたち



観劇 引き

# ヘレン・ケラー ~ひびき合うものたち

作: 松兼功  
演出: 浅野佳成

- ◆出演◆
- 白根有子 ヘレン・ケラー
  - 渋谷 愛 アニー・サリバン
  - 酒井宗親 アーサー・ケラー
  - 仲村三千代 ケート・ケラー
  - 蒲原智城 ジェームス・ケラー
  - 緒方一則 アナグノス
  - 前田浩和 医者
  - 倉八ほなみ パーシ
  - 清水菜穂子 ビニー

音楽: 小室等  
舞台美術: 上田淳子  
照明: 塚本悟  
音響: 渡辺雄亮  
照明オペレータ: 江田健  
舞台監督: 佐田剛久  
演出助手: 江原早哉香  
制作: 佐藤春江  
Picture by Andra Badulesco



人はいつもたくさんの試みで心を発信している  
言語ですら同じ記号で中味を変える――

発するものと受け止めるものとの間に生まれる心が人間の言葉である。

アニー: 「ヘレン、あなたに覚えてほしいのは、みんなと話せる言葉。

そして生きている幸せ。」

20世紀を生きたヘレンとアニーの実話をもとに、

東京演劇集団風と、作者 松兼功の協働により誕生させた物語は、  
人間と人間がおつきあう心の問題、愛情と理解の課題として、

現代を生きる私たちが見つめ直す問題を提示し、

「飽くなき人間への好奇心と愛情の交感の物語」として、現代に蘇らせます。

自分らしい明日を探しているすべての人々へ

浅野佳成 演出・芸術監督

『ヘレン・ケラー ~ひびき合うものたち』は、前半のプロローグを別にして、アニーとヘレンが出会い、2週間の共同生活を送る前後、1カ月ほどの期間を題材にして描いた物語である。この2人の出来事の中に、あまり偏ったテーマを創出する上演は行っていない。

なぜなら、ヘレン・ケラーとアニー・サリバンの偉大さは〈三重苦を乗り越えた〉ことに集約されるものではない。また、ヘレン・ケラーの生涯の断片を描くことで〈ものには名前がある〉という言葉の大切さを学ぶということでもない。事実、作者の松兼功氏自身、脳性まひによる重度の障がいを持ち、ある意味では他の人よりも重い生活を強いられているのだが、彼はその障がいを乗り越えようとは考えていない。障がいとつきあひながら、家族と語り、友人と酒を呑む。

ヘレン・ケラーが偉大だというならば、それはアニー・サリバンとの間に生まれた通じ合う心の波を、両親のアーサーとケート、ジミーやビニーなど、家族や知人に伝え、その波を世界中の人々に広げていったことではないだろうか。彼女は三重苦と向き合い、障がいとつきあひながら、アニー・サリバンとともに世界中の人々と語り合った。

ヘレンとアニーを結びつけたのは、飽くなき人間への好奇心と愛情の交感であり、教育の原点ともいえる姿である。

人と人とが出会うためにはさまざまな障がいがある。

その障がいを抱えながら、なおも人と人とはつながっていくべきだ。

私たちはこの時代にあってこそ、教育について、人間について、より語り合いたいと考えている。

